

ポプラ社絵本『らくだいにんじゃらんたろう』における魔法的忍術の考察

香月 仙空

漫画家尼子騷兵衛氏による乱太郎シリーズには主に漫画『落第忍者乱太郎』、アニメ「忍たま乱太郎」、絵本『らくだいにんじゃらんたろう』の3種類がある。本発表ではそれぞれを「落乱」、「忍たま」、「ポプらん」と呼ぶ。

本発表ではポプラ社の絵本シリーズ『らくだいにんじゃらんたろう』における魔法的忍術の使用実態と忍術書や史料との関係、役割等を考察する。「ポプらん」は1991年から2009年にかけて全27作が刊行された、6歳から小学校低学年向けの絵本作品である。

「ポプらん」は、「落乱」・「忍たま」とは世界観を異にしている。尼子氏は「落乱」・「忍たま」では架空の術は描かないようにしており、史料にある術のうち、人間ができる術、特に子どもができるような術ならなお良いと考え、使用する忍術を選んでいる。そのため、「落乱」・「忍たま」はリアリズム重視の作風である。一方、「ポプらん」では超自然的な現象を起こす魔法的忍術や、妖怪・幽霊が頻出し、ファンタジー色の強い作風が特徴である。

魔法的忍術と現実的な忍術の両方合わせた中で「ポプらん」に最も多く登場する術は幻術で、シリーズで32回登場する。有名な幻術師として尼子氏は『尼子騷兵衛作品集』（2021年）、『にんタマ、げんタマげんじゅつくらべ!?』（2002年）の付録等で果心居士、左慈を挙げており、尼子氏が参考文献として挙げている小山竜太郎の『これが忍術だ！その歴史と技法』（1963年）記載の果心居士の生魚術がポプらんに登場する。また、乱太郎達が打った手裏剣が人形になって踊り出す描写や、幻術師が吞牛の術を使う描写から、尼子氏は『伽婢子』等に登場する飛加藤や『西鶴独吟百韻自註絵巻』等に登場する塩屋長次郎等の伝承も参考にしていると考えられる。

「臨兵闘者皆陣烈在前」と唱え、手印を結ぶ、忍者が使用するイメージが強い九字護身法は9回登場し、作中では忍者の呪文として、心を落ち着かせる、妖怪を見破る、不思議な術を破る等多様な効果を発揮する。これらは『切紙九字之大事』等に記された九字護身法の効果に近い。

「オンアニチマリシエイソワカ」と唱え、手印を結ぶ摩利支天真言は7回登場し、姿を消すための術として説明されるが、毎度成功せず、身体の一部のみが消えたり、もやのような状態になってしまう。尼子氏が影響を受けたであろう古田足日氏の『忍術らくだい生』（1968年）にも呪文を唱えるも足が消えずに残ってしまう失敗描写がある。なお、摩利支天真言は『万川集海』や修験道の史料を多く含む『渡辺俊経家文書一尾張藩甲賀者関係史料』（2017年）にも記載されている。

以上のように、「ポプらん」に登場する魔法的忍術は、忍術書や近代の忍者研究資料、近世以降の創作等に基づきつつ、子ども向けに再構成されていることが明らかになった。魔法的忍術は「ポプらん」におけるファンタジックな世界観を支えると同時に、忍者像の想像的拡張と忍術表象の多様性を示す要素となっている。